

目的 日本人の食生活は、明治以後の近代化にともなって大きく変化したといわれるがその過程における栄養状態についての実証的研究はほとんどない。そこで、近代工業社会への転換をとげる前の段階である江戸時代、長州藩の庶民の食生活を計量的にあきらかにすることを目的とした。資料として、1840年代に編さんされた地誌である『防長風土注進案』をもちいた。

方法 『防長風土注進案』には長州（現在の山口県）を支藩領を除く17の宰判について村名、地形をはじめ詳しい記載がある。そこで、まず物産・産業の項に書かれた食料生産物を選びコード番号をつけた。村名、量の単位もコード化し、村コード、産物コード、記載量、単位をコンピュータに入力する。これにより食品別に生産村、生産量を検索することができる。記載名が異なるもの（たとえば、サツマイモ、リュウキュウイモ、カライモ）を合計し、単位を重量に統一した。その後、宰判ごとに食料の総生産量をもとめ、さらに人口、365日で除し、1人1日あたりの食料生産量とした。また栄養供給量をもとめた。

結果 物産の記載は、コメ、ムギ、ダイズなどの農産物については欠落はほとんどなく量の単位に統一性がある。これに対し、野菜は単位に大きなばらつきがみられた。また魚の多くは量の記載がなく、魚代銀としてまとめて記載されるものが多かった。食料生産量についてみると、瀬戸内海側、日本海側、山間部と地形的な特徴を反映しており、それは栄養素の供給割合にもあらわれていた。